

生きる力を育む教育で知られる花まる学習会（さいたま市）は12都府県に370教室を展開し、会員は約2万人。思考力を重視し、野外体験も実施するなど、偏差値一辺倒の塾教育とは一線を画す。代表の高浜正伸氏（60）は名門、県立熊本高校に進学。野球部で「いい子」の殻を破つて以降、自分がやりたいことを追求し続けてきた。熊高時代、野球漬けの生活で鍛えられた。

リーダーの母校

熊高野球部の先輩たちのおかげで「素っ裸の自分」になれた。

とか言いながら。当時は電話番号を聞いて終わりですが、衝撃でした。

「いい子」の殻を破れた

になつた
中学までの学校で、
長をやりま
自分の内側
てはいつま
を喜ばせま

じは地元の成績は常里会長、生まつた。でいたの幸せ感も違う。「

田舎にト
徒会も、も
感かりて
おもちはば
をやうぢ
持つう
(ラン)

性のアンテナはしっかりと立てていて「本当に
しろいと思える」と
「やりたい」という気持ち
この二つから強いて
ていました。

花まる学習会代表
高浜 正伸氏 (上)

熊本高校野球部



「るだろ?」とか、勝手に
考えていきました。そこを
「ドーン」と行くんで
す。そこからは樂しかっ
たですね、女の子にモテ
始めて。

両親からのプレッシャー
一はありませんでした。
開業医の父は戦争直後を
知つており「世の中はどう
うなるか分からぬ。好

先輩たちは頭がすぐ「きなことをしろ」といつもいいのですが、それだけじゃない。熊高には、いい成績だけを狙っても仕方ない、人間力がなければダメだという雰囲気がありました。「ノブレス表には出せない自分の期待されると「もっとほめられる自分でいたい」となる。過剰適応でしうね。

・オブリージュ（高貴なもの義務）」というか、本当に上に立つ人はみんなのことを考える。まさにそれを地で行く感じでした。

中学1年から始めた日記が、自身のよりどころになつた。

中学までは地元の田舎の学校で、成績は常にトップ。児童会長、生徒会長をやりました。でも、自分の内側の幸せ感としてはいつも違う。「先生を喜ばせるためにやっていました。（ライター 高橋恵里）

気持ちを吐き出すため、日記を書き始めました。ここにだけは本音を書きました。「生徒会長なん用意されたことをやつただけ」とか。この日記が自分を育てくれたと感動しています。

かり立つていて「本当におもしろいと思えることをやりたい」という気持ちちは、このころから強くなりました。持っていました。